

ひかり北地に

戸川幸

ふかや北地に

戸川幸夫



と がわ ぬき お
戸 川 幸 夫

1912年佐賀県に生まれる

作家

主な著書 「高安犬物語」「戸川幸夫動物文学全集」(全10巻)

「乃木と東郷」「イリオモテヤマネコ」

「すばらしき動物の世界」ほか

ひかり北地に

1973年1月30日 初 刷

1973年3月5日 第2刷

著 者 戸 川 幸 夫

発 行 者 松 宮 龍 起

郵便番号102 東京都千代田区富士見2-13-14

発 行 所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電話東京(262) 4 7 3 2 (営業)

(265) 2 0 7 5 (編集)

振替番号 東 京 1 3 6 8 1

印刷 光邦印刷株式会社, 製本 古賀製本株式会社

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします

ひ
か
り
北
地
に

目 次

寮祭	168
蛇事件	150
インターハイ	123
桜桃泥棒	113
娘と乞食	103
吹雪の中で	85
稽古はじめ	75
芸者	56
ストーム(嵐)	27
受験	7

装幀・挿絵 土井 栄

寂滅の海

396

さすらう魂

367

旅役者

339

犬

312

叱責

275

狼

248

春色

219

落第

199

ひとだま

189



受 験

はじめて見る雪山だった。

そして、はじめて見る雪の原だった。

「これが、みちのくか……」

角目伸太郎は窓ガラスに頬を寄せて、ゆっくりと流れ去る雪景色をながめていた。

汽車はぜえぜえと苦しうに喘ぎながら、緩やかな勾配をさきほどから行きつ戻りつしている。客車の前と後ろに機関車がついていて、進んだり、後退したりのくり返しが続いているので、いったいどっちに向かって走っているのか見当がつかない。

夜はようやく明けはなれてきた。さっきまで窓の外の闇の中を白く走っていたのが雪であらうとは想像していたが、こんなにも雄大な、どっしりとした重量感のある雪の祭典が展開されてい

ようとは思わなかった。

伸太郎がこどものころを過ごした九州では、あまり雪は降らなかったし、東京でも少なかった。浦和から北へ来たのははじめてだった伸太郎には、この雪景色は珍しい。

山々はすっぽりと雪氷に閉ざされている。

朝日がさしてきた。雪山の景観はさらに多彩になり、雄大になった。

峯島が賛美した奥羽の雪山というのはこれだな、なるほどこの山の奥には野獣が居そうだと、と思うと、山形高等学校を受験校に選んだのが間違っていなかった、と思えた。

この正月の休みに中学時代の仲よしだった峯島と和田とが伸太郎のところへ、激励のためにやってきた。峯島は去年、そして和田はさらにその一年前、つまり三人が中学を卒業した年に高校に入学していた。

二人は伸太郎に、どこへ願書を出したのだとたずねた。伸太郎がまだ出していないというと、のん気な奴だな、とあきれたように言ってから、それぞれ自分の学校を受験しろと勧めた。

和田は静岡高校の文科に入っていたので、静岡がいかに気候がよく、風光明媚であるかを力説し「美しいメツチェン（娘）も多いよ」

と笑った。峯島は山形高校の理科に入って山岳部員になっていた。それだけに山形の山岳を賛美し

「君の好きな動物も多い。宮城県との県境にな、蔵王山というどえらい山が聳えていてな、山高のコーボルトヒュッテが建ってるが、ここに泊まってスキーしているとカモシカがひょっこひょっこ現われるんだゾ」

その言葉は、伸太郎を強く促えた。伸太郎は即座に山高受験を決意した。

そんなことを汽車の遅い進行に合わせてぼんやり考えていた。ゆうべはよく眠れなかったのも、まだねむい。

「よう、乗ってたのかい？」

声をかける者がいた。神田の予備校で一しょだった村島だった。

「おう」

「山形を受けるんだろう？」

「うん」

と答えて、君もか？ と伸太郎はたずねた。昨夜、上野駅から出発したこの列車は受験列車と言つてもよいほどにたくさん受験生が乗っていた。中学をこの春に卒業するらしい童顔のものから、伸太郎同様の数年浪人組が入り混っていた。駄べっているのもいれば、夢中になってノートを覗きこんでいるのもいた。それなのに顔見知りではなかった。俺ひとりなのか……と伸太郎は思っていた。

受験であつてみれば、中学の同級生でも、予備校の顔見知りでも、同じ競争相手なのだが、やはり周囲に誰も知り合いがないということに寂しく、また心細い。

村島に声をかけられて、伸太郎はホッとした。

「どこに乗ってたんだい？」

「この二つ先の箱だ。山田と米村も乗ってるよ。向こうに來ないか」

村島は誘つた。そうか三人もか……伸太郎はやや心強くなった。

「もつとも席はないんだ。満員でな」

「じゃあ、山形に着いてから一しょに行こう。寮の部屋を借りてんだろう？」

「ああ、俺と山田はな、米村は親戚のところへ行くと行ってた。じゃあな……」

米沢を過ぎて、山形市に近づくにつれ雪の量は減っていった。

さっきは朝日がさしたと思ったのに、いつしか空はどんよりとした雪雲に蔽われて峯島が話して聞かせた蔵王の姿はなかった。

山形駅に着くと受験生たちのほとんどがぞろぞろと立ち上がった。プラットホームは踏みつけられた雪が固くこびりついていて、暖かい車室から出たとたん、ぴりりとするような寒気が頬を刺した。

「これが、みちのくか……」

伸太郎はもう一度、思った。

オーイ、こっちだ——と前の方で三人が手を振っている。伸太郎は人びとを掻き分けて駆けだしたとたん、凍った雪に足を掬すくわれて尻もちをついた。

尾髄骨から脳天にかけてずうんと痛みが走る。

「^{すべ}こつから用心して下さいや」

駅員が叫んだ。這る——不吉なッ、伸太郎は痛みをこらえて立ち上がった。

「大丈夫か？」

村島が近よってきた。

「なあに……」

伸太郎は何でもないさと平気をよそおったが、その痛みはタクシーで小白川の山高の学寮に着くまでずきずきと続いた。

小白川町というのは山形市の郊外らしく、周囲は桑や、リンゴや、桜桃の畑が続いていた。山

形市内では雪は消え、ところどころに積み重ねられた雪がどす黒く残っているに過ぎなかったが、この辺まで来ると薄くはあったが野面にしらじらと残っている。

「さすがにみちのくだなあ、三月だというのに雪があるんだもんなあ……」

伸太郎が感心したように言うのと村島と山田が、ふ、ふ……と笑った。

一高の寮の話を伸太郎は聞いていた。門限時間があって、それを過ぎてもどってきた者は塀や門を乗り越えるのだという。高等学校はどこもそうだと考えていたが、タクシーを降りた山高の学寮正門には扉はなかった。

玄関で受験票と臨時入寮許可証を提示して姓名を名乗ると、寮の委員らしい生徒が帳面と首っぴきで部屋を割当てた。

村島と山田は一しよに申し込んだらしく、同室で一寮に入れと指示された。伸太郎のを見ていた委員は

「カクメ伸太郎？　ねえぞお……」

するとのぞきこんだもう一人が

「なに無い？　君、申しこんであんのか？」

「あります」

伸太郎はむきになって答えた。

「申し込んだから、この許可証を送ってきたんでしょう」

「そらそうだな」

「どれどれ」

三人目が帳簿をひっくり返して

「ここにあるじゃないか、盲め！」

こつんと拳固で叩いた。

「痛てッ、ああほんとだ。なあーんだ。ツノメじゃないか。やっとなつた」

伸太郎はまたも嫌な気がした。辻つたり、やっとなつた、など幸先の悪いことが続く。縁起を担ぐのは嫌いな伸太郎だが、二年も浪人生活が続くと、やはり不吉の前兆は気になる。伸太郎が嫌な顔をしたのをちらと見た三人目が

「こら、忠兵衛、やっとなつたなんて……言葉に気をつけろ。受験するときはみんな神経質になつてんだぞ」

と拳固をくれた生徒に言つた。

「すまんな、悪く思うなよ。やっとなつたということは、確実にあつたということじゃからな。

俺の隣の部屋だから案内してやる」

忠兵衛と呼ばれた委員は立ち上がった。雪焼けなのか、色が黒くて鬼瓦のような四角い顔をしていた。黒いセルロイドの太枠の眼鏡がそのいかつさを一層ひき立たせている。

学寮は六つの建物から成つていて、各寮舎は渡り廊下でつながっている。この他に浴場、食堂、事務所、娯楽室、小使室、炊事場があり、寮の前には購買部とホールと、来賓を泊める家が独立してあつた。

「部屋は下が十室、二階が十室、各寮ごとにあるんじゃない」

忠兵衛は案外に親切で伸太郎の参考書でずしりと重い鞆を持って先に立ち、得意気に説明した。

「一部屋二名じゃが、委員と二年生以上だけは一部屋一名となつとる。委員は一つの寮に二名、二階と下の真中の部屋に居る。わしは下の委員だから五号室、君は六号室だよ」

「忠兵衛さんは、何年生ですか？」

伸太郎はたずねた。

「わしゃ一年生。こんど二年になる。多分なれると思うが……」

汚れた二本の白線がまつわりついている学帽を無雑作に腰に挟んだ高校生の姿に、いいなあ、この人たちはもう苦勞がなくて……といふ今のいままで思っていたのだが、忠兵衛がひょいと寂しそうな顔をしたのを見て、やはり高校生になってからも勉強の苦勞は絶えないんだな、と伸太郎は思った。

「忠兵衛さんは東京ですか？」

「わしゃ、埼玉じゃよ」

「忠兵衛さんは……」

「おいっ、あんまり忠兵衛、忠兵衛と言うなよ。こりゃあニックネームなんだぞ。俺の本当の名は白神健太というんだ」

「ああ、そうですか、失敬しました。でも、どうして忠兵衛って言うんですか？」

忠兵衛はうふッと顎を突き出して笑った。

「あんまり名譽な話じゃないがな。去年の暮れに桜昌之丞という旅役者の一座が興行に来てな。喜劇を演ったが、座長の桜昌之丞の扮した梅川忠兵衛の忠兵衛がセルロイドの眼鏡をかけて出てきやがって、俺そっくりだと皆が言うんだな……」

「はあ、それで……」

なるほど喜劇的に造られている容貌だなと伸太郎は見直した。

寮の部屋は二つずつ向き合ってつくられ、格子戸を開けると正面に下駄箱があり、右と左に障

子戸で区切られた部屋があった。忠兵衛は右手の部屋を指さして

「君はそっちだ。俺に用があったら遠慮なく障子を叩けよ」

と言った。

障子を開けると、もう先客がいた。いかにも受験勉強にやつれたという感じの、痩せた青白い青年が机に向かっていた。

伸太郎が入ってゆくと、彼の方から

「同室させてもらいます。ぼくは吉川と言います」

と挨拶した。東京の中学を去年卒業し、文科を受験するのだという。文科なら俺の敵ではない。伸太郎は安心した。

「角目さんは理科ですか？」

「そう、理甲の口を受けます」

「口というと……」

「三年になってから動物を専攻するんです」

「でも甲類は英語が第一外国語になってるから、大ていはいを選ぶんじゃないですか？」

「そう。工学部の方に進む人は理甲のイ、医学部に進む人は理乙の口を選ぶのがふつうだけど、ぼくは動物学をやりたいから理甲の口を選んだんでね。まあ、珍しいけどね」

「動物をねえ……」

吉川は納得がいけないというふうにしきりに首をひねっていた。

夕方までノートや参考書を読み返してみたが、環境が変わったせいかもしれない。吉川が風呂に入ってくると言って部屋を出ていった。